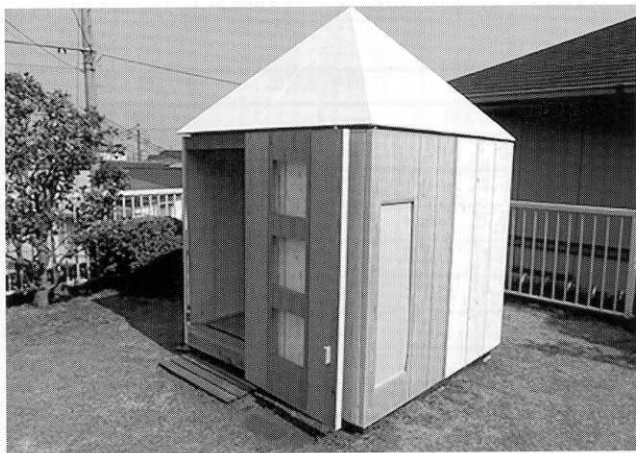


ひとつぼキャビンを屋外型の茶室空間に改造 国宝「待庵」を参考に狭小空間を演出

ひとつぼキャビンプロジェクト



茶室に改造したひとつぼキャビン

(株)サカモト(埼玉県飯能市、坂本勉社長)は5月23日、埼玉県飯能市の同社本社において同社グループが開発した「ひとつぼキャビンプロジェクト」の発表会を企画。ひとつぼキャビンを屋外型の茶室に改造し、関係者を招いて茶会を実施した。

同社グループが開発した「ひとつぼキャビン」は1坪サイズの木製可変間仕切り空間。キャビンはH型に開くし字の扉を4面に配置。扉を開くことで空間が開放的になり、扉に設けた窓の部材を取り外すことで柵やテーブルとして活用できる。4つ



企画意図を説明する田路准教授

の機能「すわる・こしかける・たつ・ねそべる」をコンセプトとし、京都大学の田路貴浩准教授が企画、建築家の三輪良恵氏が設計を担当、製造を(株)サカモトが行う。開発当初、東京都新宿区の(株)リビングデザインセンターOZONEで特別展示を実施。その後、地元の幼稚園や商業施設に設置して一般ユーザーに活用してもらう中で改良策を模索してきた。

今回は「ひとつぼキャビン」を茶室として活用。安土桃山時代に茶道を大成させた千利休が建てた日本最古の茶室建造物である国宝の「待庵」

を参考に、1坪の狭小空間での茶室を提案。茶会では飯能市の茶道連盟に所属する導師を招き、招待した関係者に抹茶を振る舞った。屋外型の茶室にするに当たり、建築物としても様々な試行錯誤を行っている。従来のタイプは屋根に撥水塗装をした和紙を使っていたが、これをテント生地にして強度をアップさせた。また、框を設けて2枚の畳を設置し、狭小の和空間の仕様にしている。

田路准教授は「今回は千利休の茶室と同様に狭小の空間であるが、茶室空間を楽しんでもらいたい。1坪でも意外と開放感があることが実感できる。今後、我々としては『ひとつぼキャビン』の販売展開を図り、販売を通じて木の良さを広く伝えていきたい」と、一般ユーザーや商業施設への販売を目指す意欲を示した。初年度の販売目標は3台。軌道に乗せた後は年間10台以上の販売を目指す。坂本社長は「CADとCAMを連動させた設計と製造によって短期間で納品できる体制を整えた。また、木に限らず鉄やアクリルも扱えるので、独自の好みを反映したオーダーメイドにも対応できる」と、迅速性と柔軟性をアピールした。